



2012年11月14日放送

## 漢方頻用処方解説 十全大補湯①

千葉大学大学院 医学研究院 和漢診療学講座 **地野 充時**  
(2013年より 千葉中央メディカルセンター 和漢診療科)

今回から2回にわたり、「漢方頻用処方解説」シリーズの十全大補湯についてお話します。

### 1. 主な効能

医療用漢方エキス製剤の効能ですが、病後や術後あるいは慢性疾患により疲労衰弱している人で、全身倦怠感、食欲不振、顔色不良、皮膚乾燥、貧血などを伴う場合や盗汗、口内乾燥感を伴う場合に用いられる、ということになっています。

### 2. 出典および処方名の由来

十全大補湯は、1151年に発刊された中国の処方集である『太平惠民和劑局方』の「諸虚門」に収載されている処方です。その条文には「男子婦人の諸虚不足、……」とありますが、これを現代語に訳してみたいと思います。「男女ともに過労や病気により食欲が低下し体力が衰え、時々発熱し身体が痛み、夢で遺精し、顔色は不良で足の力が弱り、病後に気力が回復せず、気分も憂鬱で気血が損なわれ、呼吸困難・咳や腹満があり、脾や腎の働きが衰え、全身が煩わしくもだえるような状態を治療する。この薬方の性質は温で熱というほどではなく、穏やかに補うという効果がある。気を増して精神を活発にし、脾の機能を高めて口渇を止め、正気をめぐらし、病邪を除き、脾胃を温める。その効果は広範囲に及び、詳しく述べることはできないくらいである」というふうになります。

さて、十全大補湯の処方名の由来ですが、十全という字を国語辞典で調べると「少しも

欠けたところがないこと。十分に整っていて危なげのないこと」と記載されています。したがって、十全大補湯は「十分に大いに補う薬」という意味になりますが、何を補うかという、気血を補うということになります。

### 3. 構成生薬とその薬能

十全大補湯は気を補う四君子湯と血を補う四物湯に黄耆と桂皮が加わった構成になっており、全部で10種類の生薬から構成されています。

まず、四君子湯の構成生薬である人参、朮、茯苓、甘草からご説明します。

・人参はウコギ科の御種人参の根ですが、その薬味は甘・微苦で、薬性は温です。代表的な補気薬であり、疲労や衰弱、体力低下の時に使用されます。人参にはジンセノシドに代表される人参サポニンが含まれており、その薬理作用として、抗疲労効果などが報告されています。

・朮はオケラの根茎ですが、生薬の朮には蒼朮と白朮の2種類があります。ツムラの十全大補湯に使用されているのは蒼朮です。蒼朮はキク科のホソバオケラの根茎で、その薬味は辛・苦、薬性は温です。白朮は主に胃腸の湿を除いて健胃する作用があるのですが、蒼朮は体内の湿だけでなく、体表の湿も取り除く作用もあることから、健胃作用に加え、関節の腫脹や疼痛を改善する鎮痛作用を有しています。

・茯苓はサルノコシカケ科のマツホドの菌核で、その薬味は甘、薬性は平です。茯苓には利水・健脾・安神作用があります。

・甘草はマメ科のカンゾウの根および根茎で、その薬味は甘、薬性は平です。甘草にはグリチルリチンが含まれており抗炎症効果やステロイド様作用を有しています。漢方医学的には、滋養・消炎・止痛・鎮咳作用などが知られています。

以上から、四君子湯は胃腸の機能を高め、湿を取り除くことにより、結果的に気を補う作用を有するということになります。

続いて、四物湯の構成生薬である当帰、芍薬、川芎、地黄についてご説明します。

・当帰はセリ科のトウキの根で、その薬味は甘・辛、薬性は温です。当帰には補血・調経・止痛・潤腸作用があります。

・芍薬はボタン科のシャクヤクの根で、その薬味は苦・酸、薬性は微寒です。芍薬の主成分としてはペオニフロリンが知られています。芍薬には補血・止痛作用があります。

・川芎はセリ科のセンキュウの根茎で、その薬味は辛、薬性は温です。四川産の芎藭が有名であったため、川芎という名が一般的になったと言われています。川芎には活血・止痛作用があります。

・地黄はゴマノハグサ科のジオウの根です。四物湯の地黄は本来であれば熟地黄が用いられることになっていますが、医療用漢方エキス製剤では乾地黄が使用されています。「日本薬局方」では乾地黄と熟地黄の区別はしていません。乾地黄は薬味が甘・苦、薬性は寒です。乾地黄には補血・止血作用があります。

以上から、四物湯は血を補う作用を有することになり、血虚の病態に用いられる代表的な方剤です。

続いて、黄耆と桂皮について説明します。

・黄耆はマメ科のキバナオウギの根で、その薬味は甘、薬性は微温です。黄耆には補気・利水消腫・止汗・排膿作用があります。人参が主に体内の五臓の気を補うのに対して、黄耆は体表の気を補うとされています。人参と黄耆を配合すると補益の作用が増強され、両者の配合された方剤を参耆剤と呼んでいます。

・桂皮はクスノキ科のケイの樹皮で、その薬味は甘・辛、薬性は温です。桂皮には芳香性の精油成分であるケイアルデヒドが含まれており、補陽・温裏・止痛・温通作用があります。補気・補血の薬物に桂皮を少量加えると、滋養作用が増強されるとされています。

\*

十全大補湯は四君子湯＋四物湯＋黄耆・桂皮ですので、気虚および血虚すなわち気血両虚の病態に使用されるということになりますが、体を温める生薬が多く配合されていることから、陰陽虚実では陰証で虚証の病態に使用されるということになります。

#### 4. 古医書における記載

和田東郭（1743-180）の『蕉窓方意解』には、「十全大補湯は気血ともに虚し、発熱悪寒、自汗盗汗、肢体倦怠、頭痛眩暈、口乾いて渴をなすものを治す。また、久病虚損、口渇いて食少なく、咳して下痢、驚悸発熱、あるいは寒熱往来、盗汗自汗、晡熱内熱、遺精白濁、あるいは二便血を見て小腹痛みをなし、小便短乾、あるいは大便滑泄、肛門下墜、小便頻数、陰茎癢痛などの症を治す」と記載されています。原典である『和剂局方』の条文に準じて使用される病態について述べられています。

また、津田玄仙（1737-1810）の『療治経験筆記』には、「人参養栄湯、十全大補湯、帰脾湯の類は皆後人が仲景の黄耆建中湯に倣って組みたてた変方である。薬品は変わっても方意はほぼ同様である。したがって、その目的も同じことではあるが、三方の心得はそれぞれに少しずつの区別がある。人参養栄湯は津液の枯竭を目的とする。十全大補湯は気血の虚寒を目的とする。帰脾湯は心脾の血虚を目的とする」（意識）と記載されており、人参養栄湯、十全大補湯、帰脾湯の鑑別について述べています。

北尾春圃（1658-1741）の『当荘庵家方口解』にも、「十全大補湯は気血両虚の虚冷したものに用いる方剤である。虚が甚だしいときには附子を加える。本方は心下が空虚で按されることを好み、あるいは温かい手で温めると快く感ずるのを目当てとして用いる」（意識）と記載されており、冷えが主体の陰の病態に用いると述べられています。

さらに、華岡青洲（1760-1835）の『瘍科方笈』には、「十全大補湯は、潰瘍で発熱するもの、悪寒するもの、痛むもの、膿の多いもの、膿が稀薄なもの、自汗盗汗があるもの、膿が自潰しないもの、潰れたあと瘻孔がふさがらないものなどを治す」（意識）と記載されており、外科あるいは皮膚科疾患に対しての応用について述べています。